

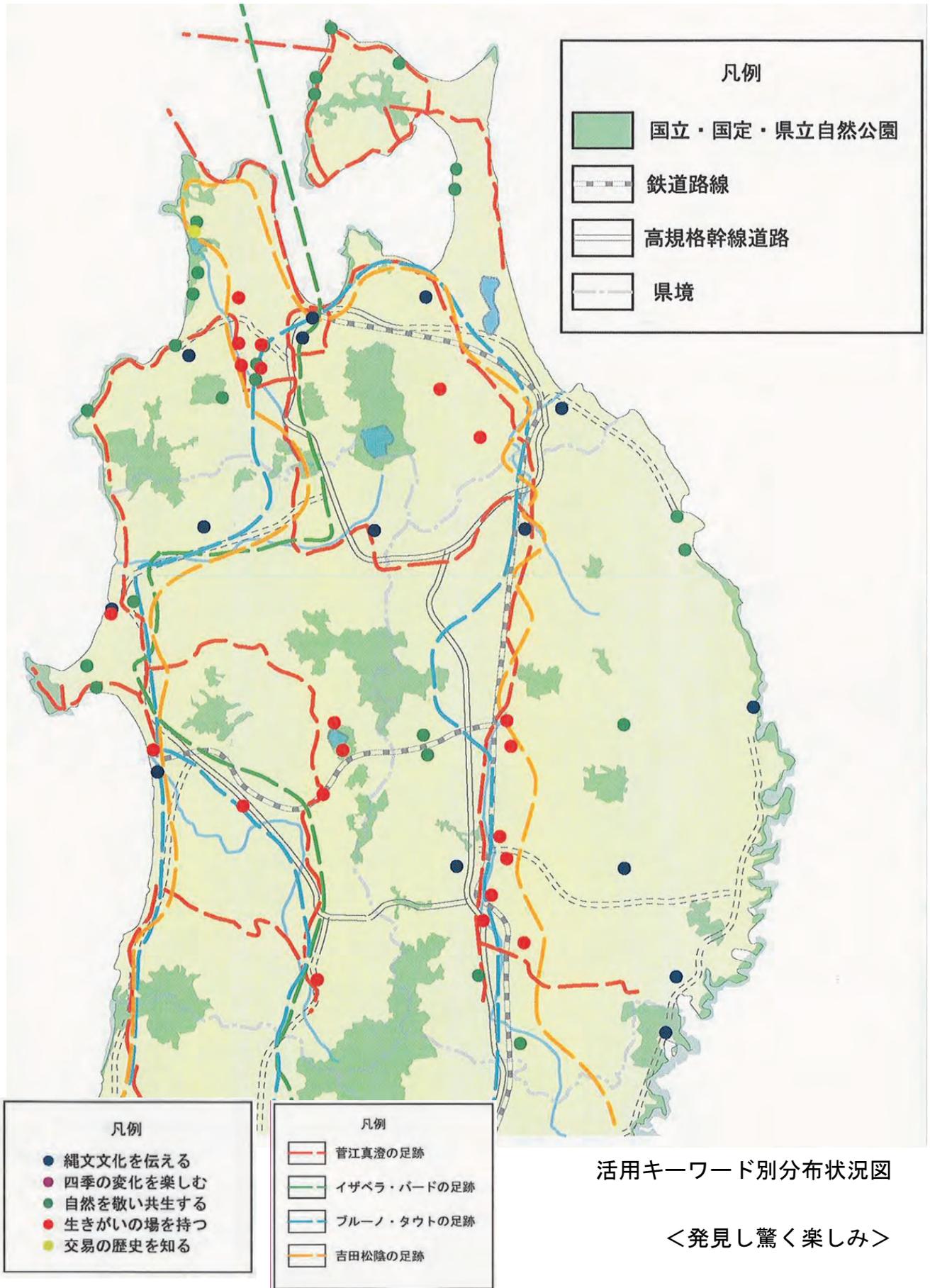
テーマ別分布状況図

<縄文文化を伝える>



テーマ別分布状況図

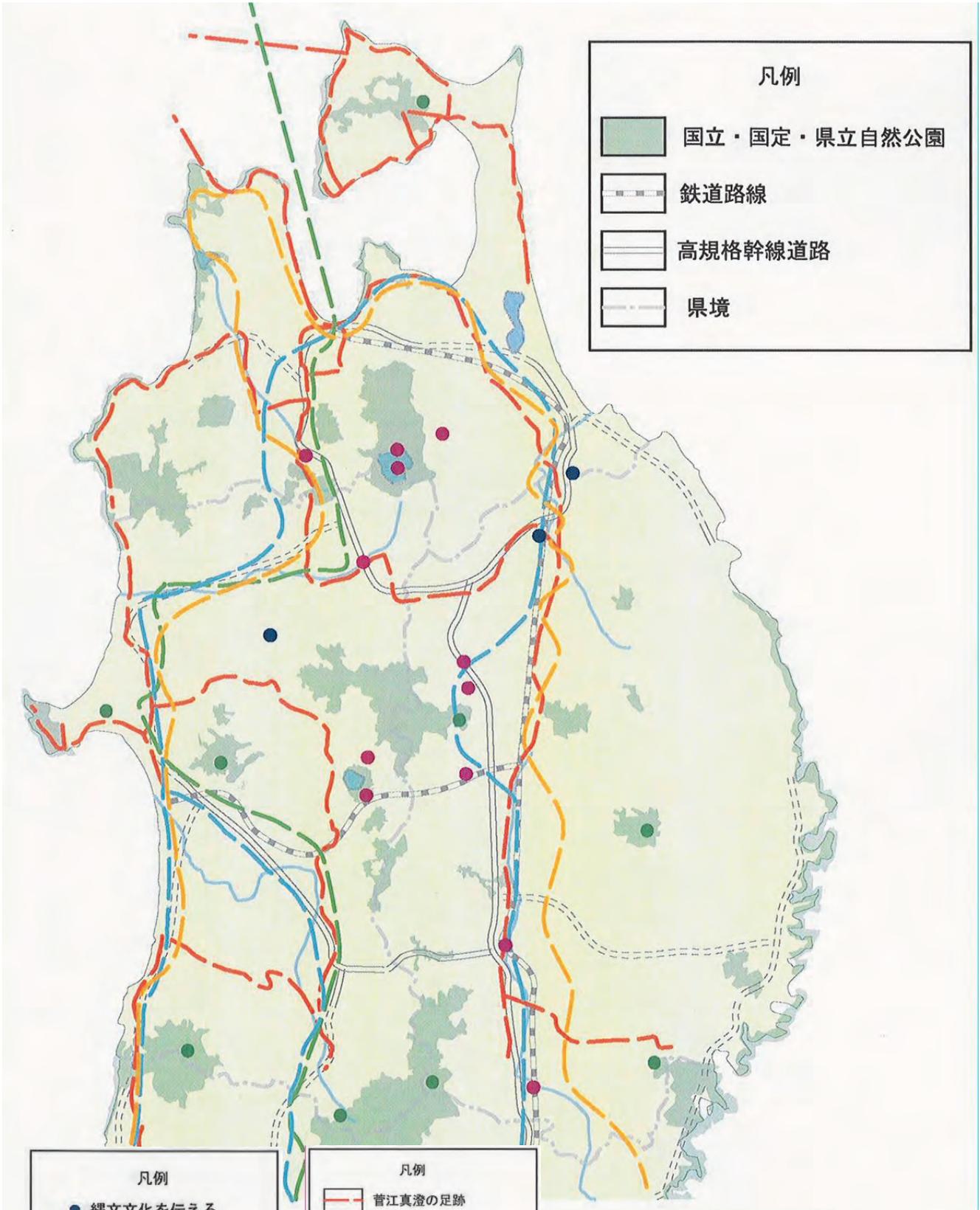
<生きがいの場を持つ・交易の歴史を知る>





活用キーワード別分布状況図

<語らい・ふれ合い・集う楽しみ>



活用キーワード別分布状況図

<くつろぎ癒される楽しみ>

第Ⅲ章 北東北ならではの風景・景観の活用と守り、育てる方針

1. 地域社会の現状と資源の活用と守り、育てるための課題

北東北における風景・景観資源は、前章の検討で明らかになったように、固有の歴史と多自然環境という共通性をもって地域に広く分布するという特徴がある。

このことは、風景・景観資源の活用による地域の自立、経済の活性化に、北東北の各地がそれぞれに可能性を有していることを意味する。

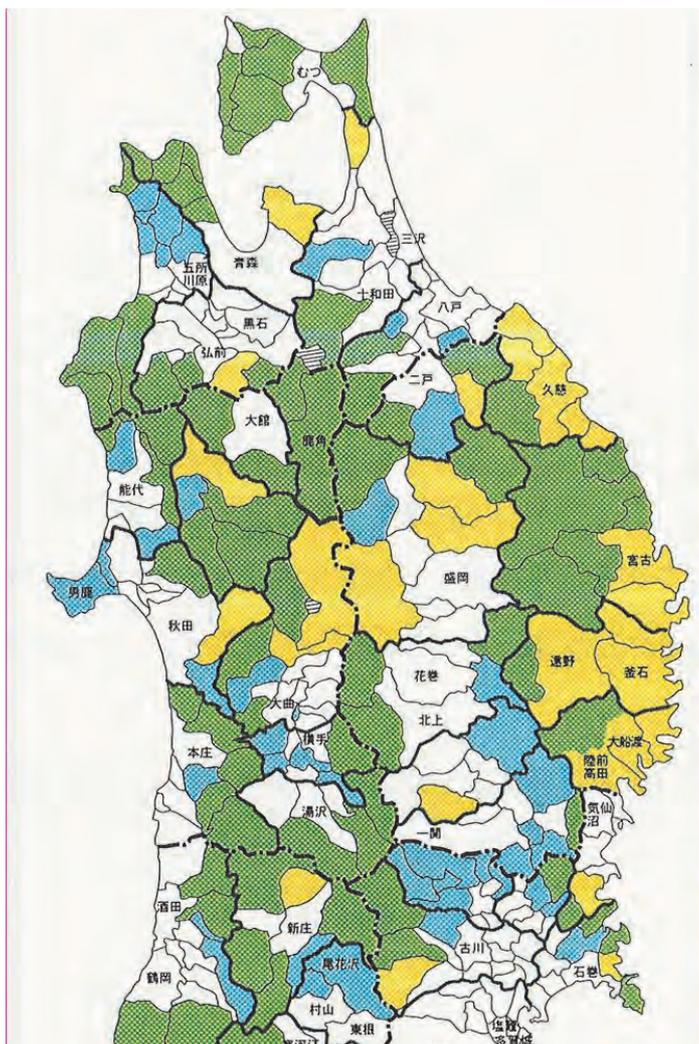
このような状況にあって、これまでの北東北においては、1960年代以降の全国的な人口移動期に、地域全体では人口の微増傾向を示したものの、過疎地域においては大きく減少した経緯がある。

都市部についても、北東北の県庁所在都市はいずれも30万人都市であり、弘前市（17.5万人）及び八戸市（24.4万人）以外はいずれも10万人を下回り、人口規模も近年過半の市が微減傾向を示すなど、都市人口が地域の総人口に占める割合は、全国の他地域に比較して大きくはない。

また、北東北においては、高齢化も全国平均を上回って進んでいる。

この結果、広域分散居住、言い換えるなら多自然居住を特徴とする北東北においては、医療サービスや公共交通サービスなどの生活サービスシステムの維持に、全国的にも顕著に問題を抱えている。

上記のような現状を踏まえると、北東北における持続可能な地域社会の形成のための課題は、「豊かな自然の中での新しいライフスタイルと生活サポートシステムの構築」というニーズに対応することが基本課題として認識することができ、具体的には以下のとおりである。



凡例			
	中山間地域 (過疎地域外) の市町村 (49 市町村)	中山間地域 (188 市町村) ※	過疎地域 (210 市町村)
	中山間地域かつ過疎地域の市町村 (139 市町村)		
	過疎地域 (中山間地域外) の市町村 (71 市町村)		
	市町村界	※：中山間地域が行政区域の大半を占める市町村	
	広域市町村圏界		
	県界		

北東北の中山間地域と過疎の状況(1997年)
(資料出典；財・東北開発研究センター)

① **経済基盤を強化し、人口減少・過疎の進展を食い止め、持続可能な地域社会を担う人材を育てる必要がある**

- ・地域社会の維持のためには、生活の安定の基盤となる経済活力を維持強化することが必須の課題である。
- ・風景・景観資源の維持のためにも、維持管理する人材と資金の確保が必要である。
- ・特に北東北の、人との関わりによって形成されてきた自然を維持していくため、中山間地域における居住人口の維持が求められる。
- ・都市部においては、歴史的に築きあげられてきた独自の風景・景観資産を生かして、交流・観光需要を吸引し、産業連関関係を維持・発展させている事例は、国内でも京都や金沢に代表されるように、内外に数多く存在する。
- ・また、中山間地域においても、豊かな自然を生かして交流需要を吸引し、経済を創出することに期待が寄せられる。
- ・北東北が、交流及び経済のグローバル化の進展に対応して自立性を獲得するため、また、中心市街地の空洞化や歴史的街並みの破壊を防止し、地域に築かれてきた資質をアピールし、経済的にも精神的にも「豊かな生活」を実現するためには、歴史・文化・ノウハウ・技術に基づいて新たな産業・雇用を創出していくことが求められる。

② **特に中山間地域において、公共交通サービスをはじめとする生活サービスの確保を図るとともに、生活にかかる負担（時間的・経済的負担）を軽減する必要がある**

- ・広域分散居住の特徴のある北東北の中山間地域においては、生活に係る負担（交通・通信に要する時間及び費用の負担など）の軽減や、生活サービス（医療・福祉・教育など）の確保、生活の安定を支える経済の創出など、生活を支える条件整備が課題とされてきたが、今後一層重要性が増す。
- ・従来、中山間地域の社会基盤は、農林業を基本とした生活を支えることを主眼に整備が進められてきた面があると考えられる。しかしながら人口減少が見通される状況のもとでは、地域社会の人口だけでは生活基盤の維持に大きな問題と制約が発生し、既に北東北では顕在化していると考えられる必要がある。
- ・また、生活サービスの確保については、今後の少子高齢化を勘案すると、全ての市町村ごとにきめ細かくサービスを提供していくことは、従来に増して困難が見通される。
- ・このような現状を踏まえると、北東北においては、交流をテーマにした新たな地域づくりの展開によって、狭義の生活支援に止まらず、地域間の連携交流や高齢者の社会参加を含む幅広い社会システム作りによって地域社会を維持していくことが必要とされる。
- ・アイドルタレントの出演する田舎暮らしや田舎に泊まろうといった番組が多数放映されていることに表されるように、中山間地域の魅力が再認識されようとしている状況を鑑みると、その重要性と可能性に大きなものを見出すことができる。

2. 風景・景観資源の活用と守り、育てる基本方針

(1) 風景・景観資源の活用の基本方針

広域分散居住・多自然居住を特徴とし、人口減少と高齢化の進展が見込まれる北東北では、先に述べたように、多くの地域で、交通サービスをはじめとする生活サービスシステムの存続にも問題が発生しており、問題は拡大方向にある。

そのため、北東北においては、東北新幹線の延伸や東北自動車道等の高速道路網の整備の推進など、高速交通体系形成の進展に対応するとともに、中山間地域の生活サービスシステムの確保のための新たな地域振興策の導入が模索されている。既存の社会資本の利用方法の工夫、例えば在来線の地域鉄道としての活用と他の交通網との連携、あるいは異なる交通手段相互間の結節などにより、生活圏の広域化に対応した生活サービスシステムの構築が求められている。

一方、地域経済は、従来の東京を頂点とするヒエラルキー型の経済産業構造のままでは問題が拡大すると考える必要がある。多国籍企業の本社と多国籍金融機関が集中する世界都市・東京への経済活動の集中がさらに加速し、一方、生産現場機能しか有さない地域では、産業の空洞化が加速するだけでなく、経済活動そのものが現状以上に流出すると考える必要がある。具体的には、系列企業による産業経済構造を追及しているだけでは、生み出される経済は本社所在地に流出し、地域内で受け止め、循環することが考えにくい状況が続くこととなる。

その結果、経済活力に問題を抱え、過疎化と少子高齢化が進む、特に中山間地域においては地域社会の維持のために公民ともに負担が増加することとなると考える必要がある。

上記の問題を克服して、北東北が自立性と経済活力の強化を図っていくためには、経済構造を、地域資本や地域の事業者が経済生産を行い、産業連関によって地域内で循環する構造に転換していく必要がある。

この点で、北東北の風景・景観資源は、新たな評価軸によって付加価値を発現し、内外にアピールし、各々の地域で切磋琢磨しながら磨きをかけて観光・交流分野等で吸引力を強化し、加えて、食をはじめとするサービス産業や地場産業と連携することによって地域の経済活力を増進することに寄与しうる。

観光や交流活動の形態も、団体型から個人や少人数のグループを主流とする方向に変化しており、それに伴って行動の分布パターンも、交通のリレーポイントとなる都市に集散点を持ち、地域に広く展開する方向に変化しており、魅力的な中山間地域への吸引にも可能性が開ける。

量的には様々であるが、即効的な集客を呼び込むことにも期待が寄せられる。その後の新たな産業経済連関を生み出していくことを視野に入れることも可能である。

このような地域像は、北イタリアの諸都市やスイスの諸都市をイメージするとわかりやすい。並列的な都市間関係を保ちながら、歴史性によって一体的な地域像を確立している。

以上の認識に立ち、北東北が風景・景観資源を活用して自立性を強めていくためには、次の方針に沿ってポテンシャルを高めていくことが方向となる。

① **広域的に連携し、要素が多様に複合する拠点的な交流圏を形成することによって付加価値を高める**

- ・観光需要吸引等の取組みは、地域・地域個々には既に様々に取組みが展開されている。
- ・しかしながら、個々の取組みだけでは、それぞれに素晴らしい魅力を持っていても一過性の需要吸引に止まってしまうことが多い。例えば、全国的に取組みが展開されているコンベンション戦略も、周辺に遊びの要素が複合していることが重要とされる。
- ・広域的に周遊し、かつ、温泉で憩い、食を楽しむことができるなどの複合化が付加価値を高める。四季折々の変化を楽しみ、あるいは農事などを体験することができる複合化もリピート需要を吸引することにつながる。
- ・上記のように、北東北における観光・交流が多様性を備えるためには、北東北全体または資源がまとまって分布する広域的な範囲が一体の活動フィールドとして認識されるようにネットワーク化するとともに、風景・景観資源と関連する伝統工芸等の産業や生活文化と複合化することによって、新たな付加価値でとらえられる地域像として内外に向けて発信し、訴求力のある交流活動を創出することが方針となる。

② **都市と中山間地域との結びつきを強化し、中山間地域及びまちなかに交流需要を吸引する**

- ・中山間地域においては、医療や教育、消費といった日常的な生活サービスの利便の享受のために、都市との結びつきを強めることが求められる。
- ・これら生活サービスの確保のためには、一定量の需要が必要であり、そのためには、地域の人口だけで不足する部分を交流需要の創出によって補うことが求められる。
- ・また、中山間地域に交流需要を呼び込むためには、交通の利便性の確保が必要である。特に、今後、移動手段に制約のある高齢者や小中高生をはじめとする幅広い交流需要を吸引しようとするためには、公共的な交通サービスの確保が不可欠である。
- ・観光形態も、前述したように、団体・パック型から個人や少人数グループ型へと変化しており、リレーポイントとして都市に集散点を持つパターンへと変化が進んでいる。
- ・このような変化に着目すると、今後、中山間地域及びまちなかへの交流需要吸引のためには、都市と中山間地域との結びつきを強化することが方針となる。
- ・なお、中山間地域への交流需要の吸引及び都市と中山間地域の結びつきの強化のための社会資本の有効活用の方針に言及すると、以下のように考えることができる。

i. 交流需要吸引及び生活サービス確保のための基盤の活用と充実

- ・中山間地域と中小都市・中核都市を結ぶ交通基盤の強化
- ・多自然居住を支えるための、中山間地域と広域交通ネットワークを結ぶ交通基盤の確保
- ・中山間地域における情報インフラの整備（医療等福祉の充実と複合）
- ・地場産業（農業等）の販路拡大のためのインランドデポ機能の確保
- ・冬季の安心を確保するサブルートまたは複数拠点に発着することのできるルートの確保
- ・コミュニティバスとの連携による域内周遊交通サービスの確保

ii. 広域観光需要の吸引のための基盤の活用と充実

- ・ 空港、新幹線駅など広域交通の集散点における地域交通との結節機能の充実
- ・ 観光ルートの開発等と連携した都市と中山間地域を結ぶ公共交通サービスの充実
- ・ 仙台等中枢都市と主要交流圏を結ぶ高速バス等の誘致
- ・ 鉄道の回遊運行の導入、青森・秋田間の新幹線とのリレー運行鉄道サービスの導入などによる観光活動軸の形成（着と発が異なる周遊や、冬季の代替ルートの確保も可能となる）
- ・ 高速道路と主要都市中心部を結ぶ主要幹線道路整備

③ 観光産業をはじめとして、1次産業などとの協働により地域経済を活性化する

- ・ 北東北における地域居住者の生活の経済的安定のためには、観光や交流等によって生み出される経済が、生産者や、知恵やサービスを提供する人々の家計に結びつく経済循環の仕組みを構築することが必要である。
- ・ そのためには、独自性に富んだ風景・景観資源を地域の生活様式や自然環境の維持管理のノウハウと結びつけ、体験・学習することのできる資源とし、また食文化などとの組み合わせによる地場産業等との結びつきや、民俗芸能に着目した文化的事業との組み合わせなどによって、交流活動によってもたらされる経済を地域内で受け止め、循環する構造に転換していくことが方針となる。新たな経済需要と雇用を生み出すことに展望が開ける。
- ・ 観光産業にとどまらず、教育分野において、語り部や自然・農業技術の指導者としてアクティブシルバーが活躍することにも結びつく。

④ ふるさとを思う心を豊かにし、定住社会づくりを促す

- ・ これまでの内発型の文化的活動や事業の多くは、篤志家の出現によるところが大きい。また、スポット的に存在しているものが多い。
- ・ しかし、それではなかなか地域のアイデンティティを形成するまでには至らず、また、地域の生活文化に付加価値を見出すまでには至らない。
- ・ 生活文化の継承や新たな開発に結び付けていくためには、知的創造の場を、地域の中に数多く作り出していく必要がある。
- ・ 従って、北東北特有のアイデンティティの確立のためには、知的好奇心に満ち、話題性に富んだテーマに沿って、風景・景観資源と活動を地域内に数多く創出し、ネットワーク化することによって、文化を共有する人々のコラボレーション・結束力を創出し、文化イベントや事業を創出することが方針となる。

(2) 風景・景観資源を守り、育てる基本方針

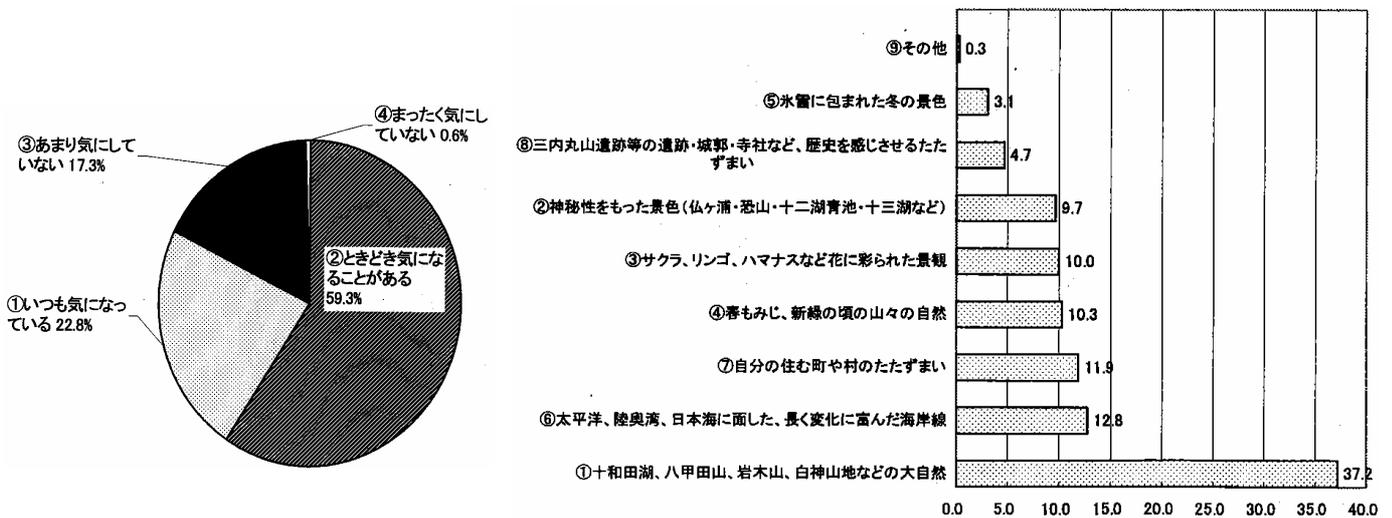
北東北には、山野に囲まれた風景を大切に思い、古くから「雪形（ゆきがた）」により農作業など暮らしのリズムを学んできたことに代表されるような、生活に密着した風景や景観が展開する。また、北東北の風景・景観は、縄文の頃から約1万年の歳月の間、人々の生活と係わってきたことも徐々に解明されつつある

しかしながら、それら記憶は、文明的な生活様式の普及により、自然との関わりが必要さが生活実感から遠のくにしたがって忘れ去られようとしている。

このため、潜在的に優れた風景・景観特性を持つ北東北にあって、岩手県の大規模建築等行為景観形成基準ハンドブックに指摘されるように、近年、高速交通網の整備や車社会化の進展等により、北上川流域等に顕著に見られる市街地の拡大や建築物の高層化、大規模施設の郊外展開などが進み、風景・景観特性が変貌しつつある。

中山間地域においても、過疎化と少子高齢化の進展に歯止めがかからず、北東北の自然の特徴である人の手が関与することによって保たれてきた自然植生の維持の困難性が増大傾向にある。

全国的にも、荒廃した山河の復興から高度成長期を経て得た生活と引き換えに多くの自然が失われ、バブル期が過ぎて漸く自然が見直され、重要性が認識されはじめている。北東北においても、下記のアンケート結果に見られるように、いつも気になっている、時々気になることがあると合わせると、8割を超える人が関心を持っている。



景色・眺めについての意識

大切にしたい景観

青森県による景観に関する県民意識アンケート（平成14年11月青森県政策推進室）

以上の認識に立つと、北東北の風景・景観資源を守り育てていくための方針は以下のように考えられる。

① **第1歩として、地域住民が、身近に存在する風景・景観の良さを再認識する活動を数多く作り出す**

- ・地域の資産となる風景・景観は、地域住民にとって誇りとなるはずである。住民が誇れるものと思えば、その風景・景観はさらに磨きをかける活動に展開し、内外に発信しようとする。
- ・しかしながら、風景・景観の評価は人によって様々であり、また、それら風景・景観が形成され、守られてきた背景を知らなければ良さを実感することができない。
- ・風景・景観の良さを再発見のための方法として、教育分野における取組みから開始することが有効な方策となると考えられる。義務教育分野において、フィールドワークとして再発見活動を行い、それを子供たちが家に持ち帰って両親や祖父母に話し、認識を形成し拡大していく。高校生や大学生による、様々な提案活動を展開し、さらに活動を拡大していく。その上で、市民活動として本格化することが方策となると考えられる。
- ・このため、取組みの第1歩として、地域住民自ら、風景・景観を再評価し、身近にある資源を再発見し、資質を皆で共有し・大切に思う活動から始めることが方針となる。

② **行政による支援を得、また、経済的な基盤を強化して、保全・管理に当たる住民運動を育てる**

- ・風景・景観資源を守り育てるためには、清掃などの取組みから始まって、地域住民による保全・管理運動を育てる必要がある。
- ・自然等の管理に当たる専門的な知識や技能を有する人材の確保も課題となる。
- ・しかしながら、善意だけに依存しているだけでは限界があり、継続も多くを期待することは難しいと考える必要がある。
- ・また、保全し管理するためには、資金の確保が不可欠である。
- ・そのため、今後、守り育てる活動を本格化するためには、地域住民による取組みの支援をはじめとして、交流需要の吸引等による経済活力の付与などを背景にしながら、保全・管理に当たる市民運動を育て、また、人材の定着を促していくことが方針となる。

3. 想定する活動創出分野

北東北の風景・景観資源を活用し、また、守り育てるためには、風景・景観とはどのような意味を持ち、広く認識を共有する活動からスタートすることが望まれる。

そのためには、様々なテーマに沿って、北東北全体に分布する風景・景観資源に着目し、それを地域の豊かさとして、また誇りとして再認識する文化的な活動を各地に数多く創発し、活動内容を内外に発信することが重要である。

地域経済の振興に結びつけるためには、探究心に呼び起こされた日常的な時間消費活動や交流需要の活性化をはじめとして、観光分野における需要吸引を図る必要がある。

観光分野についてみると、先に述べた、行動形態が団体型から個客や少人数グループ型へと変化しており、それに伴って行動パターンも観光スポットから観光スポットへと直接移動するパターンから、都市に集散点を持つパターンへと変化していることは、滞在地における食事をはじめとする居住者の生活と共通する分野での消費を拡大することや、居住者の日々の生活を支える公共交通の利用需要となって交通事業の存立を支える可能性を有することを意味すると考える必要がある。

また、北東北においては、近年、縄文が脚光を浴び、内外に対して新たな発信力と訴求力を有する地域として飛躍しうる可能性が見出されようとしており、先導的な活動も開始されている。北東北の縄文遺跡は、大地にそのままの形で残され、周辺の自然を含み、往時の暮らしを思わせる遺跡としては、出土品の文化的価値と並んで評価されるべき貴重な資源となりうる。

それら遺跡からの出土により、例えば食材や食品加工、あるいは工芸分野において、現代に継承されているものがあることが明らかになってきた。豊かで広範にひろがる自然特性も、古くから継承されてきた生活の知恵と密接に関連づけて再評価することができる。

民俗芸能分野においても、北東北には秋田県田沢湖町の「たざわこ芸術村」と「わらび座」のように、雇用を創出している例がある。

以上の認識に立つと、北東北における風景・景観資源を活用し守り育てるための活動は、教育分野から産業経済分野まで幅広い分野において想定することができ、以下のとおりである。

<交流需要の増進・経済振興のための活動>

■教育・生涯学習分野

◎教育分野における「ふるさと再発見活動」

- *義務教育の一環として、体験学習や報告会・発表会などによる交流を展開する
- *青森県で開催されている、「高校景観デザインコンテスト」のような活動を広域で展開する

◎縄文や自然環境をテーマとする地域を学ぶ活動

- *各種専門家の参画を仰いでキャラバンや地域塾を実施する
- *高齢者の生きがいの場として活用する

■地域間交流・市民活動分野

◎中山間地域への交流需要創出のための活動

- *豊かな自然を生かし、地元小中学生の義務教育の一環としての活動や、地域外からの修学旅行による体験学習などを吸引する
- *農家の参画により受入れ態勢を構築する
- *地域居住者がガイド・指導者となって活躍する

◎さまざまなサークルや研究グループによる文化的活動

- *NPO、大学、商工会などとの協働により活動体を各地に創出し、それらをネットワーク化・情報交換できるようにして大きな活動にする
- *活動の場として、行政に支援等により、空き店舗や古民家を活動の場として提供する

◎さまざまなテーマで開催される交流イベント・キャンペーン

- *ふるさとの宝探し、「普段着の似合うまち百選」といったテーマで文化的豊かさやゆとりを表現するようなフォトコンテストなどを実施する
- *先駆的事例として、三内丸山遺跡・大湯環状列石・御所野遺跡の三縄文遺跡による「縄文週間」がある

◎歴史的建築物を活用した文化芸術活動

- *青森県弘前市の洋館や岩手県江刺市の舟運時代の蔵を生かした活動づくりが参考となり、各地に活動を創出する

◎四季の花飾り等の活動

- *商工会などと連携して、商店街や街かど、沿道に四季のきれいな風景づくりを表彰するような取り組みを実施する

■広域観光分野

◎縄文遺跡と岡本太郎や棟方志功の見た北東北や作品、海の幸・森の幸などを組み合わせて、例えば「縄文ロマンチック紀行」等として商品化する

- *岡本太郎や棟方志功が縄文やそれに由来する民俗芸能に強い影響を受けていることは意外に知られていない。北東北には記念講演や記念館、作品があり、それらと組み合わせる。

◎四季を彩る風景を再評価し、温泉や民俗芸能、冬の祭り、食などを組合せて商品化する
*アクティブシルバーがガイドや指導者、語り部としてつくことにより魅力を増進する

■都市観光・まちなか観光分野（主に地域住民による時間消費活動）

◎まちなかの歴史的建造物や街並み等を活用して、地域住民の交流や文化活動、あるいは時間消費活動の拠点となる、センター・オブ・センターと呼べるようなコアを創り出し、周辺に分布する風景・景観資源や歴史資源、食などと組み合わせて1日活動圏となる程度の広がり新たなレクリエーション需要を創出する

*都市に集散点を持つ観光交流活動パターンを創出し、都市の活性化と、周辺と結ぶ公共交通サービスの存立を支える

*商店街などと連携して、町の角々に街かど博物館をつくりだすことも有効

■地域産業分野

◎農林水産業と観光との連携

*フィッシャーマンズワーフや市、産地直販などによる販路拡大と、食品加工産業等の振興を図る

◎中山間地域の集落の農家の参画協力を得て、例えば「myお米」など、観光農業化する

*中山間地域への外部経済の導入を図る

◎歴史的資源を活用した文化事業

*秋田県田沢湖町の「たざわこ芸術村」と「わらび座」が参考となり、まちなかにおけるふるさと再発見活動やまち中観光との連携などにより文化事業を振興する

◎伝統工芸と縄文の漆などを複合化して生活文化を新たな産業に昇華させる

*木工や漆などの伝統工芸と例えば玩具などと複合化して新たな産業を興す

<守り育てるための活動>

■フィールドワーク・自然保護活動分野

◎清掃などの市民活動

*青森県八戸市の「はちのへ小さな浜の会」のような清掃などの活動をあちこちに創る

◎教育・研究機関との連携による各種保全・保護活動

*各地に市民学会をつくりだす

◎流域・里山環境づくり

*交流会などの取り組みから出発して、広域でのルールづくりや活動に展開する

■グリーンツーリズム・エコツアー分野

◎中高年を主なターゲットとしたトレッキングに、食と森や本物の四季の味覚などを組み合わせて付加価値を付与する

*中山間地域の経済活性化にも貢献する

4. 活用モデルの例示

北東北における風景・景観資源の有効活用による交流活動の活性化と吸引は、前述したように、今後の持続可能な地域社会の形成に資するものとするため、中山間地域への交流需要の吸引を重視して取り組むことが求められる。

また、公共交通サービスをはじめとする生活サービスシステムの維持及び都市の生活中心としての役割の強化のためには、都市と中山間地域との結びつきを強化する必要がある。

これまでの検討においては、連携交流の創出や経済振興の可能性と課題について検討を行ってきたが、それをふまえるとともに、資源の分布状況や交通網等の社会基盤の状況を総合的に勘案し、今後取り組むことが望まれる具体の活用モデルを後述のように例示する。

例示 1 北東北 縄文文化発信連携づくり

プロジェクトのイメージ

■縄文人の知恵を発見し、ふるさとの誇りとして内外に発信する活動

- ・北東北の縄文文化は、森と海と川がもたらした恵によって繁栄した時期があり、稲作の定着以降に形成された西日本の文化よりもはるかに古くから定住社会が存在していた。
- ・従って、北東北各地には縄文遺跡が数多く分布しており、これら遺跡の周辺には縄文を原風景とする自然が独特の風景・景観を示す里山や森林などとして残されており、自然と共生した縄文人の暮らしを類推することができる。
- ・遺跡は祖先が暮らした場所であり、ふるさとの原点として地域住民に認識され、祖先と親しみ、心を癒す場として活用されることが望まれる。特に、次世代を担う子供たちには、体験学習を通じた地域の歴史を学ぶ場として、高齢者たちには知的的好奇心に触発されて意欲的に参加する場として活用されることが望まれる。
- ・遺跡は、研究者のためだけにあるのではなく、愛好者のみに持て囃されるものでもない。遺跡を擁する地域の人々によって、周辺の風景・景観や、地域に受け継がれてきた民俗伝承、食文化とともに保護・活用され、独自の文化活動を創出して地域内外に発信することにより、観光産業等の面で地域経済にも波及し、地域を活性化させることとなる。
- ・遺跡は、単独では潜在力が小さいものが多く、個々に存在するだけでは地域活性化の起爆剤とはならないが、他の遺跡と連携することによって相互に補完しあい、単独ではできない多様な活動を展開することができ、地域住民の関心や参加意欲を引き出すことができる。
- ・北東北には、情報発信活動に実績をあげている NPO 法人もあり、また各県の代表的な縄文遺跡が連携してイベントを開催している事例もある。
- ・今後は、これらの先進的な活動を北東北全体に拡大し、自然と共生した縄文人の暮らしの知恵を現代の生活に活かす連携の輪を拡げ、新たな北東北のイメージとして内外に発信するための活動を展開していくことが求められる。

■民俗芸能や冬の祭り、食文化や伝統工芸などと結びつけて楽しみを増やす

- ・北東北の生活文化には、例えば農事の節目に行われている虫送りなどの民間信仰や民俗芸能などに、縄文文化の色濃く残す。
- ・それら生活文化や楽しみが縄文研究と組合わされれば魅力は何倍にも膨らむ。
- ・北東北には、食文化の面で、しょっつるに見る魚醤が残っている。北東北の縄文の食は漁撈（サケ・マス）にも比重を置いていたとされていることから考えても、塩汁文化の

原型が古代からあったと考えることができる。逆に、九州の縄文は、狩猟採取と焼畑農業であり、北東北とは異なる。

- ・また、北東北では、日本海側を中心に、味噌や飯ずしなどの発酵食文化も多彩である。長いところで半年も雪に埋もれる生活が、冬の貯蔵（保存）技術を高め、多彩な発酵食を生み出す要因となったと考えられる。
- ・山野のもたらした食材を楽しむだけでなく、現代の食文化との共通性を再発見して楽しむのひとつとすることができる。
- ・漆塗りについても、例えば津軽塗りは江戸期に始まったものとされるが、縄文の発掘品の中には漆塗りのものが多々ある。
- ・縄文の漆技術の再現などとして伝統工芸に新たな活力を生み出すこともできる。

主体形成の方向

- 三内丸山遺跡（青森県）、大湯環状列石（秋田県）、御所野遺跡（岩手県）が、連携して毎年継続して共同事業を行っており、この連携の輪の近隣遺跡への拡大を促進する。
- そのためには、行政の支援を得て、専門研究グループとの定期的な研究会等を各遺跡が連携して開催し、文化ボランティアを育成する。
- 将来的には情報ネットワークを南東北や北海道まで広げた組織化を目指す。

例示2 美しい歳時記の郷づくり

プロジェクトのイメージ

■「雪形（ゆきがた）」等に代表される生活の知恵の発掘と伝承 —自然に学ぶ暦づくり—

- ・北東北には、春先の山に残る残雪の形を「ユキガタ（雪形）」と呼び、その形の変化によって田植えの時期を判断するなど、農作業のカレンダーとしていた知恵がある。花や紅葉、山菜の時期も暮らしのカレンダーとなっていたと考えられる。その折々に、例えば「虫送り」や「オシラ様」などの民間信仰が行われていた。
- ・風景・景観資源を単に風雅なものとしてとらえるだけでなく、生きた活用を図り、また付加価値を付与するためにも、それらの知恵は伝承していく必要がある。
- ・高齢者などからそれら暮らしの知恵を集めることからはじめ、伝承していく取組みが「美しい歳時記の郷づくり」の第一歩となる。

■農家の参画と組織化による体験学習需要の受け入れ

- ・教育分野との連携により、例えば、自然観察と体験農業などの形での研修・修学旅行需要を吸引する。
- ・受入れ農家の組織化と高齢者が指導者となって、地元北東北をはじめとする小・中・高生や大学生などを受け入れることからスタートする。
- ・青森県田子町は、わが国有数のにんにくの産地であるが、農業の停滞への対応策として、海外の姉妹都市との交流や秋田県鹿角市や岩手県浄法寺町との交流、学生のサマーキャンプの受入れなどが行われており、参考となる。
- ・青森県名川町では、「あおもり達者村」構想として、「昔懐かしい『土いじり』」、「健康」、「仲間づくり・コミュニティ」、「旅行」の4つをキーワードとし、首都圏の中高齢層を主なターゲットとして、農業体験等のグリーンツーリズム需要を吸引している。

■周辺の温泉や食、民俗芸能などとの複合化によるグリーンツーリズムなどの観光需要や都市との交流需要の吸引

- ・例えば、阿仁周辺では自然とマタギに着目して「花の名山とまたぎの里」と題し、周辺市町村と連携し、八幡平温泉郷などとも連携する広域的かつ複合的な拠点化を図り、観光産業との連携によって商品化して大々的に打ち出す。
- ・青森県のむつ周辺、秋田県の男鹿周辺では、海の幸やじゅんさいなど四季の食、山岳・民間信仰、北前船の再現などとの複合化が考えられる。

- ・外国人の目には、日本の繊細な自然、樹種の多様さや季節の変化、田園の美観は絶賛されると言われる。田植えの頃の水と緑の整然とした水田風景、茅葺屋根と山を背景とした里山景観、清流の景観は欧米人に高く評価されると言われる。
- ・大森貝塚を発見し、日本の考古学の基礎を築き、19世紀末に通算2年ほど日本に滞在したエドワード・S・モースのコレクションや写真が収められている、アメリカ・ボストン市郊外のセイラム・ピーボディー博物館に、日本の農村風景や民具が数多く陳列されており、小西四郎（元東京大学・日本近代史）が当時の農業国日本に強い興味を寄せていたと紹介していることから見ても、北東北の田園風景は魅力的な資産となりうると考えられる。
- ・滞在型農村体験やホームステイなどを通じた都市との交流も効果的であり、例えば首都圏の市町村と相互交流の関係を結び、高齢者や小中学生の交流を受け入れることも考えられる。
- ・秋田県田沢湖町の「わらび座」でも、近隣農家との提携によって、体験学習の修学旅行を受入れて複合化を図っている

主体形成の方向

- 将来的には、連携する市町村と観光産業等により、新たな組織を設立して事業化することが考えられる。
- 当面は、県及び地元市町村の支援による機関のような、やや緩やかな連携からスタートし、試行的な取り組みを重ねつつ事業化に結びつけることが適する。
- 地元在住者による自然案内協会のような組織の設立によるガイドの確保をあわせて行う。

例示3 ふるさと再発見・文化創造拠点づくり

プロジェクトのイメージ

■ふるさと再発見活動の展開

- ・例えば、昔の風景画や絵葉書を集めて風景・景観がどのように変化してきたか、失われてしまったものや、残され大切にされている風景・景観の要素を再発見することから研究を始めることが考えられる。また、このような取組みを通じて、地域の人々の間に、ふるさとの風景・景観の評価に関する共通認識を形成していくこともできる。データベースとして発掘・蓄積することも重要。
- ・青森県の「ふるさと眺望点」、岩手県で一般から募集した「岩手の残したい景観」などの取組みを北東北全体を対象として展開することも住民の意識を高める手法として有効であると考えられる。青森県で行われている「高校景観デザインコンテスト」のような試みを北東北全体に拡大することも考えられる。
- ・活動グループの創発は、例えば、小中学校を通じた教育委員会による呼びかけなどから参加者を募ることも方法の一つとなる。
- ・活動拠点は、行政の要請と費用支援によって、歴史的な建造物を再生したギャラリーや民家、あるいは古い学校施設内、文化施設内に常設するとなお良い。

■市町村及び地元経済界の支援と有志への呼びかけ、観光コーディネーターの参画による拠点回遊周遊圏及びまちなか観光活性化プロジェクトを企画する

- ・具体例として、岩手県江刺市の舟運に関連していた数多くの蔵を生かしてまちなか観光を吸引し、また、地域産業に結びつけている先進事例がある。
- ・JALが着目して広く紹介した、青森県弘前市の、まちなかに点在する洋館を、まちかど博物館やカフェを供える憩いの施設として活用し、フランス料理と組み合わせて都市観光を吸引している取組みも事例の一つとなる。
- ・観光動向も、従来の「金銭消費型観光」から「時間消費型観光」へと移行してゆき、それに伴って消費行動も滞在＝生活に関連する部分に比率が高まると考えられる。
- ・今後、先進事例を含めて、拠点となるまちと、その周辺に分布する自然環境や歴史文化に関連する様々な風景・景観資源と広域的に連携して要素を複合化・多様化し、観光交流活動を吸引することが望まれる。
- ・伝統工芸と連携して、体験することのできる要素を盛り込むことも重要である。
- ・回遊圏は、概ね1日生活圏程度の広がりであることが適する。

- ・ターゲットは、地域住民による日常的なレクリエーション・探訪、仙台等の東北の主要な市場からの需要、歴史文化探訪の外客、ビジネスの合間や時間調整等の需要を見込む。
- ・将来的には、北東北全体と連携して、例えば「北東北ミシュラン」のような情報として打ち出すことも考えられる。

主体形成の方向

- 岩手県江刺市では有志により「株式会社 黒船」が設立され、蔵を活用したまちなか再生の取組みが展開されている。
- より広域的に連携するためには、関係市町村の商工団体、賛同企業や個人からの出資に加え、県、関係市町村の企画部門や教育委員会、関連団体からの助成により、例えば、法人格を有する組織の設立を目指すことが望まれる。
- 当面は、関係市町村や商工団体が中心となって地域居住者や有志に呼びかけ、ネットワークづくりを行うとともに、観光産業等と連携してキャンペーンを展開することから活動を開始することが考えられる。

なお、以上のような提案は、これまでも地域経済や地域文化の振興を目的として、部分的に、また小規模な単位で取組みが展開されてきた。

しかしながら、本提案は、風景・景観資源という、これまでとは異なる視点から提案を行ったものであり、特に北東北という優れた自然という点で特徴を有する地域になじみやすいと思われる。

これら提案が実施されることにより、北東北の連携が進み、風景・景観資源の情報発信が多くなれば、それだけ住民の地域に住む楽しみや喜びが増し、ひいてはそれが人口減少の食い止めに繋がる動きに結びつくことに期待が寄せられる。

第Ⅳ章 有効活用のための仕組みと体制づくりのあり方

1. 風景・景観資源の活用によって得るべき効果

北東北における風景・景観資源は、特定のエリアに高密度に集積しているものではなく、地域に広く分布するという点でわが国では稀な特徴であり、それら資質は、第Ⅲ章で述べたように、広域的に連携して複合化・多様化する、言い換えるなら「点から面へと連携・結束する」ことによって強い訴求力を発揮することが求められる。

また、各々に個性を有する風景・景観資源は、その活用によって「資源が存在する地域に交流需要を吸引し、各々の地域に経済活力を与え、地域社会の存立のための生活サービスシステムの維持に貢献する」ことが可能になると考えられた。

しかしながら、それら風景・景観資源の魅力の度合いやインパクトは、地域に暮らす人々や、地域外の人々、また外国人にとって、各々に異なり、一様に論じることはできない。

ここで、旅人の見た北東北としてとりあげ、北東北を民俗学的視点から探訪したと考えられる、菅江真澄、イザベラバード及びブルーノタウトの3人の足跡を改めて追ってみると、3人とも、十和田や陸中海岸といったいわゆる景勝地よりも人々の暮らしの場を中心に地域を訪ね歩いているという共通性を見出すことができる。

イザベラバードの著に、暮らし向きや経済的な状況を貧しいと酷評しつつ、東洋のアルカディアと絶賛しているように、地域の人々の心の豊かさ、文化的豊かさに感動を覚えたのではないかと考えることができる。

ブルーノタウトも、仙台に居住し、伝統工芸等の記録や普及に努めたと伝えられている。

国立民俗博物館による、大森貝塚の発見者エドワード・S・モースの日本観の研究として守屋毅が説いた、「近代化という奇跡の発展」が「奇跡に近い消滅」を招いた日本古来の風俗や農山漁村の風景の重要性の指摘にもそのような心象を読み取ることができる（モースの研究成果は「共同研究 モースと日本」（1998年小学館）にまとめられている）。

縄文文化と関連づけて意味を再発見することのでき、また、豊かに田園風景が広がる北東北の風景・景観資源は、外国人には強い興味の対象となる可能性を秘めていると考えることができる。

また、例えば、岡本太郎が縄文に強い衝撃を受け、太郎なりの見方で縄文文化と民俗芸能の関連性を説き、北東北にのめり込んだと伝えられる事実や、長部日出男（弘前出身直木賞作家）による棟方志功の紹介文にある「多くの人が既に感じているであろうに、その作風には、縄文的な特色が強い」と述べ、棟方を見出した民藝運動家柳宗悦の創設した日本民藝館でその作品を縄文的エネルギーと紹介しているように、棟方が縄文と地域の生活文化を融合させて作品を生み出した事実から類推すると、一過性の観光に飽き足らなさを覚えている日本人に対しても、大きな魅力となって映るポテンシャルを秘めていると考えることができる。

世界の芸術家を招き、縄文文化の素晴らしさを再認識して内外に発信し、例えば縄文をテーマにして公開制作を行うことや、金沢市で文化資産を生かして新たな地域産業を興そうと立ち上げた「ファッション産業創造機構」のように、地元の伝統工芸や伝統芸能と現代アートとの融合によって新たな産業を興すなど、芸術分野で世界の脚光を浴びる可能性も視野に入れることができる。

以上の考察から、これまでの検討によって明らかとなった資源の活用可能性とポテンシャルをふまえ、その活用によって狙おうとする影響の度合いや視野の広がり、活用によって得るべき効果として列記すると以下のとおりである。

① **国内外に強い訴求力をもって発信する「北東北像」の確立による
新たな文化・交流・経済圏としてのジャンプアップ**

- ・ 北東北には、随所に、また幅広い分野に、縄文時代から受け継がれてきた歴史と伝統があり、それら縄文文化が残る独自の風景・景観資源を活かして北東北像としてクローズアップすることにより、内外から多くの関心を引きつけることが可能であることが確認された。
- ・ このような資質を活かし、北東北においては、今後、これまでの首都圏などとの縦列的な関係から自立した内発的かつ循環的な成長力を有する地域として活動を展開していくため、国内外に、独自の文化圏として認識される「北東北」という印象的な地域像を強く発信することにより、わが国の中でも独自の文化圏としての認識を形成し、それを背景として新たな文化・交流・経済圏としてジャンプアップすることを目指す。

② **「北東北再発見ファン」の掘り起こしによる観光躍進**

- ・ 風景・景観資源の活用による北東北観光の躍進は、幅広く深く北東北を知ろうとする「北東北再発見ファン」を掘り起こし、経済活力を吸引することを狙いとする。
- ・ 一過性の、いわゆる歓楽・行楽観光とは異なり、現在の観光産業の量的なマーケットの面から見れば小規模かもしれないが、また、エコツーリズムやグリーンツーリズムなど、今後の市場拡大によるところが大きいかもしれないが、地に足のついた根強い需要を掘り起こすことに展望を見出すことができる。
- ・ 高度成長期にふるさとを離れた団塊の世代が高齢者となり、ライフスタイルや価値観が大きく変化しようとしている今日、北東北にはわが国のアイデンティティ・ふるさとの原点を思わせる魅力に富む。
- ・ 国内外には、次のような北東北ファンとなる層が存在すると考えられ、今後創発される各種プロジェクトにより、それら需要を吸引することを目指す。
 - * 北東北の歴史文化に魅力を感じているが、一過性の東北観光には飽き足らなさを覚えている日本人
 - * わが国あるいは北東アジアの歴史文化に興味を抱いているが、京都、奈良など一部

の著名な観光地を除いて具体的情報の提供が不十分な欧米人

- * 東京など大都市の経済的文化的影響や国家的な歴史観などに惑わされることなく、アジアの文化の生成の視点から地域間交流を望むアジアの人々 など

③ 産業経済分野における新たな付加価値生産力の付与と事業者の創業促進

- ・ 新たな事業の創出は、有志の発案と出現を待っているだけでは、コーディネート力やノウハウの面で限界があり、また先行き不安もあるため、個別の取り組みの枠内だけでは限界があり、大きな社会的な動きとはなりにくいと考える必要がある。
- ・ 例えば観光分野においても、地域の商工会をはじめとして企業の協力と参画を得るためには、行政による計画的な位置づけと支援があることによって、実効性の裏づけと社会的な信用が得られ、本腰を入れて安心して参画する意向が生まれる。
- ・ 食や伝統工芸をはじめとする地場産業も、豊かな歴史と文化と融合することにより、新たな付加価値を創出することができる。
- ・ このため、今後は三県が連携するとともに、多様なパートナーシップが集う仕組みを構築し、風景・景観資源に着目した新たな地域振興ビジョンの構築と周知により、新たな経済活動や創業促進に結びつけることを目指す。

④ 中山間地域における雇用の創出と居住者の生活の安定

- ・ 過疎化に悩む中山間地域における地域社会の維持のためには、生活の安定のための雇用の確保と収入の安定が必要である。
- ・ また、公共交通や情報通信等の生活の利便性を確保するためには一定の需要が不可欠であるが、北東北の中山間地域においては、維持するための密度に問題を抱える。
- ・ そのため、今後は、風景・景観資源を活かして中山間地域への観光交流需要の吸引を図り、居住者の雇用の創出と生活の安定を図り、アクティブシルバーの社会参加や新たな事業の担い手としての活躍を含めて、地域発の経済基盤を構築し、活力ある地域社会を実現することを目指す。

⑤ 地域住民によるふるさと再発見活動やイベント、文化・交流活動等を通じた、北東北躍進に向けた新たな社会潮流の創出

- ・ 北東北の歴史・文化に裏づけられた地域像は、住民が自らの生活の場を、固有の歴史と文化に根ざした北東北という広がりの中で認識することを可能にし、これにより、北東北という広がりを持った広域的な連携・交流・活動が促進されることが展望される。
- ・ また、そのうねりは大きな社会潮流となり、継続し、情報を発信し続けることによって力を発揮する。
- ・ このため、今後は、教育分野をはじめとして生涯学習分野、市民運動分野などの幅広い分野で、地域の商工会や経済会などを含む幅広い連携により、文化的イベントなど通じて社会潮流を創りだし、北東北躍進に向けて地域活力を生み出していくことを目指す。

風景景観資源の活用によって得るべき効果・目標レベルの考え方

＜持続可能な社会づくりに向けた課題＞

■ 経済基盤を強化し、人口減少・過疎の進展を食い止め、持続可能な地域社会を担う人材を育てる必要がある

・地域社会の維持のためには、生活の安定の基盤となる経済活力を維持強化することが必須であり、豊かな自然を生かして交流需要を吸引し、経済を創出することが必要

■ 特に中山間地域において、公共交通サービスをはじめとする生活サービスの確保を図るとともに、生活にかかる負担を軽減する必要がある

・交流をテーマにした新たな地域づくりの展開によって、狭義の生活支援に止まらず、地域間の連携交流や高齢者の社会参加を含む幅広い社会システム作りによって地域社会を維持していくことが必要

＜活用の基本方針＞

■ 広域的に連携し、要素が多様に複合する拠点的な交流圏を形成して付加価値を高める

・連携・複合して、個々の取組みだけの限界を超えるポテンシャルを発揮する

■ 都市と中山間地域との結びつきを強化し、中山間地域及びまちなかに交流需要を吸引する

・生活サービスシステムの維持のため、地域に人口だけで不足する部分を交流需要によって補う

■ 観光産業をはじめとして、1次産業などとの協働により地域経済を活性化させる

・体験・学習する活用や、食文化などとの組み合わせにより、交流に伴う経済を地域内で受け止め、循環する仕組みをつくりだす

■ ふるさとを思う心を豊かにし、定住社会づくりを促す

・ふるさとの良さを再発見し、知的創造の場を数多く創りだすことにより定住意向を育てる

■ 新たな視点で再認識される北東北の資質は国内外から関心を引きつける
 ■ 活用モデル及び分野の広がりには、北東北各地の豊かな可能性と展望を物語る

＜得るべき効果・目標レベル＞

■ 国内外に強い訴求力をもって発信する「北東北像」の確立による新たな文化・交流・経済圏としてのジャンプアップ

・従来の首都圏などとの縦列的な関係から脱却して内発的かつ循環的な地域としてジャンプアップする

■ 「北東北再発見ファン」の掘り起こしによる観光躍進

・東アジアや日本国内から、また地域内から、地に足のついた根強い観光・交流需要を掘り起こす

■ 産業経済分野における新たな付加価値生産力の付与と事業者の創業促進

・行政の計画的な位置づけと支援を背景として地元経済界のコロナボレーション・創業を活性化させる

■ 中山間地域における雇用の創出と居住者の生活の安定

・観光交流需要の吸引により、雇用創出と生活の安定、担い手の確保を図る

■ 地域住民によるふるさと再発見活動やイベント、文化・交流活動等を通じた北東北躍進に向けた新たな社会潮流の創出

・教育、生涯学習分野等の幅広い分野、経済界等との幅広い連携によって文化的活動等を通じて活力を生み出す

2. 仕組みづくりと取り組みの展開のあり方

風景・景観資源の活用による地域振興のための取り組みは、今後、広域的な連携によるスケールメリットの発揮、個々の地域の協調的競争関係の活性化によるブラッシュアップ、地域居住者や産業の参画による構想策定と事業化に結びつけることが望まれる。

そのためには、試行的な取り組みから始まって、地域横断的かつ分野横断的な様々な取り組み施策が、地域の各地で展開される必要がある。

この点で、北東北三県においては、これまでも知事サミットに始まる各種連携が行われてきており、その仕組みを基本として、再編成・強化していくことが方向となる。

以上の点を念頭に置き、先に述べた風景・景観資源の活用によって得るべき効果を踏まえ、今後構築することが望まれる仕組み・枠組みは具体的には次のように提案することができる。

① 重層的かつ多分野による広域連携体制の構築

- ・北東北三県においては、既に、知事サミットに基づく観光振興の取り組み連携などが展開されている。
- ・北東北三県が、それぞれの良さを持ち寄り、新たな地域像を発信するとともに、スケールメリットをアピールして地域振興に結びつけていくためには、これまで以上に結束を強化し、内外に対する発信力を強化する必要がある。
- ・地域個々の取組みと、三県による社会資本の活用や整備の施策と連動させる、あるいは行政計画への位置づけに結びつけることも必要である。
- ・このため、今後は、既往の連携の仕組みを基本として、経済界や多様な分野の事業者の参画するさらに実効性のある仕組みに機能強化していくことが求められる。
- ・また、風景・景観資源の魅力を、より付加価値の高いものとし、交流需要を吸引するに足るインセンティブのあるものとするためには、様々な要素を広域的に結びつけ、複合的な楽しみ方のできるものとするのが求められる。
- ・広域的に連携するためには、様々な資源を有する広域的な範囲のまちやむらが結束し、一体的な文化圏として認識できるようにしなければならない。
- ・また、交通サービスをはじめとする生活サービスシステムの整備等に関連する取り組みを連携して行う必要がある。事業に結びつけ、あるいは官民の役割を調整するためには広域的かつ多様な主体の協議や調整のための仕組みが不可欠である。交通サービスのあり方などについては、県境を越える広がりを対象とする検討や調整も必要となる。
- ・このため、今後は、三県による広域的な連携と、それに加えて、拠点となる圏域を各地に選定し、圏域ごとの広域連携の体制を立ち上げる必要がある。
- ・なお、当面の連携事業として、本調査により収集したデータをホームページとしてブラッシュアップし、地域住民をはじめとして各方面に情報提供するとともに、活動への参画を募ることが望まれ、試行的取り組みとして具体化されることを提案する。

② 多様な主体が参画する、地域による「活用プラン」の策定

- 例えば一日活動圏程度の広がりには多様な資源が複合し、比較的密度も高い圏域における、試行的な取組みからはじめとする、将来の展開を見据えたアクションプランや、例えば農家のホームステイの輪の拡大、語り部やガイド・指導者となって高齢者が参加し、加えて産業経済分野の民間主体が参画する事業構想まで含む具体の活用プランは、地域の発意と主体の参画によって策定される必要がある。
- このような取組みは、これまでも小規模な単位で行われてきたが、広域的に連携・結束することによってより大きなポテンシャルを発揮する。
- このため、それら圏域においては、今後、行政の支援により、構想策定に当たることが望まれる。
- また、この仕組みと体制は、今後の取組みメニューの充実や事業拡充のため、継続的なものとするのが望まれる。
- 複合的・多様な魅力を備える活用プランの検討に当たっての広がりについては次のように考えることができる。
 - 例えば、自然公園など共通のアイデンティティ、地域認識でとらえることのできる広がりを対象とする。
 - 広がり的大小は、一日活動圏程度の範囲がイメージされ、資源が比較的密度高く分布し、ネットワーク化することができる範囲が対象となる。
 - 資源に、温泉や民俗芸能、祭りなどの、楽しみや癒しの要素があり、複合的・多様な活動が可能である。
 - 活動の拠点、集散点となるまちなかがあり、そこには交通結節機能や交通のリレーポイントがある。
 - 望ましくは、まちなかそのものが歴史的資質に富み、周辺の資源の情報案内センターや、地域住民の活動拠点、祝祭・ロビー空間を有する拠点を形成することができる。
- 手法については、民間経済界をはじめとする多方面にわたる参加と協力による組織づくり、社会基盤の有効活用方策との連携や事業計画立案のための資金調達も必要なことから、総合的な事業としての広がりを持つ、次の方向性が考えられる。
 - 「観光交流空間づくりモデル事業」(国土交通省)の導入
 - * 秋田県雄物川のウォータースポーツの振興等を目的とした流域連携が先行事例として取組みを展開しており、広域連携によるハード・ソフトの事業戦略策定の手法として導入する
 - 「うるおい・緑・景観モデルまちづくり制度」(国土交通省)の導入
 - * 青森県十和田市が先行事例として取組みを展開しており、街並み景観・環境整備手法として導入する
 - 「夢街道ルネッサンス事業」(国土交通省)の導入
 - * 周遊ネットワーク整備と情報提供や休息施設等の支援機能整備の手法として導入する

- 「美しいふるさと・国づくり推進事業」（農林水産省）の導入
 - *農山漁村の快適な環境、景観整備のための手法として導入する
- 「グリーン・ツーリズム・ビジネス育成事業、グリーン・ツーリズム・センター機能確立事業」（農林水産省）の導入
 - *中山間地域における交流需要の受入れ態勢整備のための手法として導入する
- 「知恵を活かす地域づくり・人づくり支援事業」（農林水産省）の導入
 - *観光や産業振興のためのノウハウ提供者やコーディネーター確保の手法として導入する

③ 地元による「ふるさと再発見活動」の支援

- ・資源の充実・発掘のため、また、地域住民に認識を形成していくためには、地域住民による地道な活動を積み重ねていくことが重要である。
- ・ふるさとを思う意識を醸成するためには、教育分野における息の長い取組みが求められる。
- ・このためには、地元の教育分野や行政の企画部門が中心となって参加を呼びかけ、活動の輪を創っていくことが望まれる。
- ・活動や参画を呼びかける範囲や対象については、テーマによって弾力的に考える必要がある。
- ・また、地域の良さを再認識し、活動を立ち上げるためには、地域外または海外からの評価や声があり、それが大きな輪となる道筋があると効果的である。
- ・活動の核を生み出すため、例えば、地域外から数人の有識者を1～2ヶ月に一度程度の頻度で招き、地域の良さを語り合う「地域塾」または「市民会議」を巡回方式で開催し、地域に気運の盛り上がりを作り出すことが考えられ、具体化に向けて検討されることを提案する。
- ・教育分野における取組みについては、義務教育の現場で、体験学習や社会参加活動を取り入れるとともに、県境を越えた共同開催や各種大会等によって普及に努める取組みが求められる。

なお、今後の施策展開については、地域の連携方策の検討の中で議論が深められる必要があるが、基本的な方向性を展望すると、以上の仕組みを前提とし、次ページのように考えることができる。

今後の取組みの展開のあり方

●地域の関心と意欲の創出のための準備段階

- ◎三県協働によるサミットやシンポジウム、フォーラム、プレイベントなどの開催による内外への宣言と参画の呼びかけ
 - * 縄文遺跡の交流イベントや、青森県で行われている「高校景観デザインコンテスト」、「景観の日」が参考となり、広域展開・発展的展開
 - * 地元テレビや教育テレビ、放送大学との連携により、自然の知恵や縄文人の知恵などを集め放映する
- ◎行政の広域連携による窓口・プラットフォームの設置とサポートシステムの構築
 - * 行政の広域連携による再発見活動の窓口の設置と教育分野などとの連携による活動の展開
 - * 生涯学習分野との連携による活動の創出
 - * 公益法人等の活用による事務局及び場の設置と活動費用の支援
- ◎キーパーソンへの参画要請と地域への呼びかけによるネットワークづくり
 - * 例えば、「北東北広域連携推進協議会」、「縄文発信の会」、「北東北三県観光推進協議会」等が核となる
- ◎有識者の招聘による「地域塾」や「市民会議」の定期的開催
 - * 数人の有識者を1～2ヶ月に1度程度招き、地域の良さを語りある催しを巡回方式で展開する
- ◎三県の支援による研究機関・経済界への協力要請と体制づくりの着手及び先導的活動支援
 - * 三県が支援して教育・研究分野、各地の商工会議所、民間事業者に呼びかけ、協議会設置に向けた準備会（実行委員会方式など）を設立し、シンポジウムなどの活動を企画・開催
- ◎データベースの充実のための作業の継続

●試行的な活動の創出と体制づくり段階

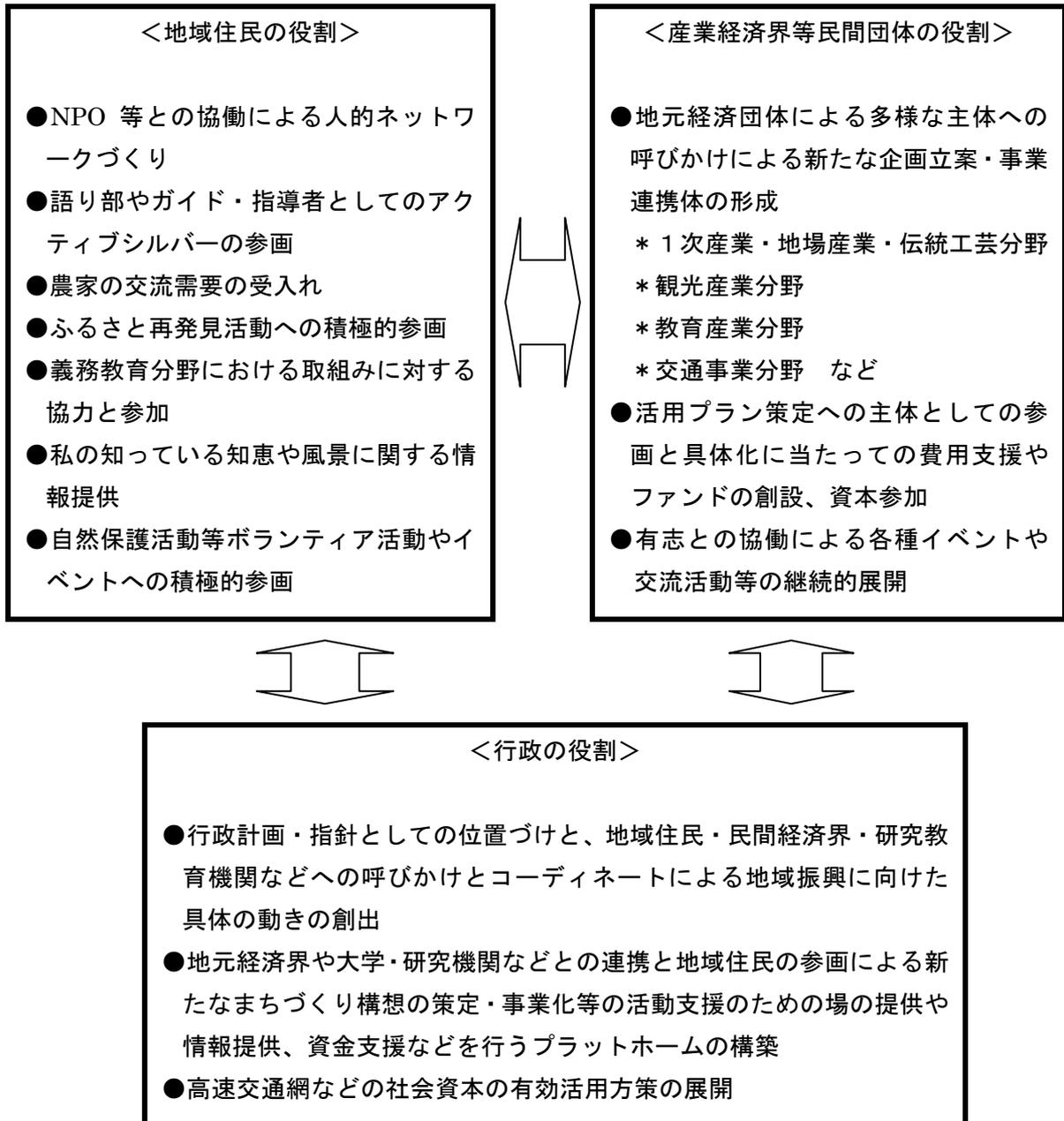
- ◎実行委員会による先導的な活動グループや有志による活動の展開
 - * ワークショップによる連携プロジェクトの企画立案
 - * データベース及びマップの充実 など
- ◎民間経済団体や企業への協力要請によるネットワークの拡大とイベントの継続的開催
 - * 実行委員会によるテーマに沿った再発見成果の発表、フォーラムなどの継続的展開
 - * 民間経済界への協力要請による活動資金の調達と運用
- ◎広域連携による各種 PR パンプの作成と各種コンテストなどキャンペーン活動の展開
 - * データベース蓄積、マップの充実成果の PR パンプ発行
 - * 各種コンテストなどによるキャンペーン
 - * ワークショップなどによるプロジェクトの試行

●体制・仕組みの確立と新たな交流・経済活動の本格展開

- ◎協議会方式などによる北東北風景・景観再発見活動の体制確立と発信活動の本格展開
 - * 北東北再発見活動組織の確立と地域による活動の充実
 - * 広報誌の発行、メディアの活用によるスペシャル番組等によるプロモーション
 - * 観光産業等との連携による商品化
 - * 風景・景観の持続可能方策（行政施策や地域ルールなど）の検討と提言
- ◎事業体の立ち上げ
 - * 試行プロジェクトの本格事業化（民間経済界・地元事業者との連携による）

3. 体制づくりと役割分担のあり方

広域・多分野連携による風景・景観資源の活用施策は、行政、民間団体及び地域住民の三者が主体となってパートナーシップ体制を構築し、各々に役割を担う必要があり、下図のとおりである。



4. 施策としての具体化に向けて

人口減少や高齢化、グローバルな地域間競争などの新たな国土政策上の課題に対応するためには、平成 16 年 5 月の国土審議会調査改革部会報告に提唱されるように、都府県を越える規模の自立的なブロックからなる「自立圏連帯型国土」の形成が必要とされている。

また、これからの地域づくりには、内閣府の「日本 21 世紀ビジョン」の最終案により、2030 年までに目指す日本の姿として、「文化創造国家」、「時間的にゆとり」、「小さな官」が柱として掲げられたように、文化の創造と発信が重要戦略となる。

北東北においては、これまでの検討によって、新たな視点で再認識することのできる固有の歴史的・文化的資質と、自然環境面での優れた資質を柱とする個性的な風景・景観資源が豊かに集積し、地域全体に広く分布していることが明らかとなった。

北東北のそれら風景・景観資源には、北東北の新たな地域像として設定した「四季の変化を楽しむ」、「自然を敬い共生する」、「縄文文化を伝える」、「生きがいの場を持つ」及び「交易の歴史を知る」の 5 つのテーマに基づく資源が地域全体に広く分布することによる、一体的な地域像としてイメージし、内外に発信することのできる「共通性」と、個々の資源や地域ごとに各々に個性的かつ魅力的な「独自性」と、地域間相互が結びついて活力を創出し、またポテンシャルを増進することのできる「補完性」が備わっていることが確認された。

北東北固有の風景・景観資源は、都市学者 J・ジェイコブズが、活力ある中小企業がネットワーク型の連携関係を形成して集積し、グローバルな活動を展開している北イタリアのボローニャなどを「第三のイタリア」と称したように、歴史と文化に裏づけられた地域像を確立すること、地域に生まれ蓄積されてきた文化的資産を活用して創造性に富む活動を展開し、地域の成長を牽引する企業や個人の事業や活動の素材となる。

観光・交流需要の吸引により経済活力の増進に寄与する。観光・交流と食や伝統芸能・伝統工芸などの分野の融合によって新たな産業の創出を促すことができる。教育分野や地域住民の活動により、ふるさとを思い大切にす心の醸成を力強く推進することができる。

そのためには、風景・景観資源の共有と活用によって、文化的・心理的近親感をより一層強固なものとし、そのことによって、これまで障壁となっていた経済的距離感を縮小し、一体性を強化する必要がある。

ふるさとを思う心の育成、定住社会づくりのためには、地域による「ふるさと再発見活動」などにより、風景・景観資源を再認識し、資質をより豊かで、かつ奥行きのあるものとすることによって、地域住民の「生きる力」の原点として活用する必要がある。

一体的な地域像の確立については、共通性を活かして、三県が一体となり、多様な分野にわたる連携体制を構築し、様々なメディアや業界団体等と連携し、また地域住民と一体となって地域像を力強く発信していく。

経済の振興と地域活力の創出については、独自性を活かして、行政をはじめとして、観光分野などの地域内外の経済界、NPO 団体、教育研究機関、地域住民などの幅広い連携、外部専門家の知恵の導入によって、資質の蓄積をより豊かにし、磨きをかけながら、各々の地域の発意と工夫によって活性化していく。

補完性の発現については、事業面での連携と社会資本の有効活用によって、地域全体に広く活力を浸透・波及させていく。

上記の理念に沿った風景・景観資源の活用による地域の自立・経済の活性化のための仕組みや体制、役割分担のあり方については、これまでの検討によって様々な提言をしてきたとおりであるが、今後は、地域が主体となって、経済団体や観光等の事業者、地域内外の文化・研究機関や有識者の参画と協力を得て、様々な知見と資金を確保し、具体的なアクションプランと事業プランの策定、並びに組織・体制づくりにステップアップし様々な事業を創出していくことが望まれる。

本調査において、新たな視点で再認識することができた、また、今後さらに充実していく北東北ならではの風景・景観資源は、地域資源調査において提唱された、北東北を北海道と宮城を結ぶ広域的な観光ルートに組み込むことを戦略とする「北東北グリーンツーリズム大國構想」と「北東北やすらぎ観光プラン」の柱として、例えば、縄文文化に光をあてることにより観光関連事業者と連携し、これまでも取組みが行われている縄文をテーマとする広域連携の動きと連動して、新たな観光エリアとして打ち出すといった新たな視野が開ける。

観光戦略と複合化して、地域資源調査により産業戦略として掲げられた「北東北特産品きらめき戦略」、「北東北 food gardens 構想」の展開方策として、産地に広がる風景・景観と組み合わせ、本物を楽しむことのできる場として注目を集めるという視野も開ける。

また、ニーズ分析調査によって明らかとなった、北東北に親しみは感じるが、経済的な一体感まではないという住民意識についても、風景・景観資源の活用によって、文化的な結びつきを強固なものとすることによって、生活や業務面での交流活動の活性化にとどまらず、企業の広域的な事業展開意向を促し、経済的な距離感を縮める効果を発揮させていく。

上記の方向に向けた風景・景観資源の活用は、地域の居住者に、ふるさとの魅力に対する再認識を創出して地域に暮らす喜びと誇りを与えるとともに、地域を学ぶ楽しみを与え、さらに経済活力の増進に結びつけることによって、「生きる力」という言葉に集約される活力を与える。

以上に述べたように、北東北における風景・景観資源の活用による地域の自立・経済の活性化は、今後のわが国の地域づくりの先進的なモデルとなる可能性と潜在力を有する。

活用の用途や目的は、多様な広がり可能性を有し、地域の発意と工夫によって様々な組み合わせが可能である。

今後は、北東北三県が認識を共有し、多方面の協力を得ながら連携し、地域による活動を各地に創出し、具体の動きを通じて地域の資質を内外に発信し、地域活力の増進と地域住民の「生きる力」に結びつけていくことが望まれる。

調査結果の整理

北東北には、新たな視点で再認識できる固有の歴史・文化的資質と、自然環境面での優れた資質を柱とする個性的な風景・景観資源が豊かに集積する。それらは、一体的な地域像として内外に発信することのできる「共通性」と、地域ごとに個性的・魅力的な「独自性」と、地域間相互が結びついて活力を創出し、ポテンシャルを増進できる「補完性」が備わっている。今後は、風景・景観資源の活用により北東北三県の一体性の強化を図り、多方面の協力を得ながら連携し、地域による活動を各地に創出し、具体の動きを通じて地域の資質を内外に発信することにより、地域活力の増進と地域住民の「生きる力」に結びつけていくことが望まれる。

北東北ならではの風景・景観	活用と守り、育てる基本方針	活用モデル	仕組みづくりと施策展開及び役割分担のあり方
<p>■四季の変化を楽しむ</p> <ul style="list-style-type: none"> 四季の変化を楽しむことのできる大自然が豊かに広がる <p>■自然を敬い共生する</p> <ul style="list-style-type: none"> 自然と共生し、自然から学んできた生活文化がある <p>■縄文文化を伝える</p> <ul style="list-style-type: none"> 縄文文化が受け継がれている風景・景観がある <p>■生きがいの場を持つ</p> <ul style="list-style-type: none"> 独自の文化が花開いたまちが各地に存在する <p>■交易の歴史を知る</p> <ul style="list-style-type: none"> 舟運や歴史的街道の要衝に様々な文化が融合した歴史が残っている 	<p>■活用の基本方針</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎広域的に連携し、要素が多様に複合する拠点的な交流圏を形成することにより付加価値を高める ◎都市と中山間地域との結びつきを強化し、中山間地域及びまちなかに交流需要を吸引する ◎観光産業をはじめとして、1次産業などとの協働により地域経済を活性化する ◎ふるさとを思う心を豊かにし、定住社会づくりを促す <p>■守り、育てる基本方針</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎地域住民が、身近に存在する風景・景観の良さを再認識する活動を数多く作り出す ◎行政による支援を得、また、経済的な基盤を強化して、保全・管理に当たる住民運動を育てる <p>■活動創出の方針</p> <p>風景や景観の持つ意味の認識形成のための活動と、地域経済の振興に結びつけるための観光や地域産業分野等における幅広い分野で同時並行的に創出する。</p> <p>＜交流・経済振興のための活動＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎教育・生涯学習分野 <ul style="list-style-type: none"> ・教育分野における「ふるさと再発見活動」 ・縄文や自然をテーマとする地域を学ぶ活動 ◎地域間交流・市民活動分野 <ul style="list-style-type: none"> ・中山間地域への交流需要創出のための活動 ・様々なサークルや研究グループの文化活動 ・様々なテーマの交流イベント・キャンペーン ・歴史的建築物を活用した文化芸術活動 ・四季の花飾り等の活動 ◎観光分野 <ul style="list-style-type: none"> ・多様な要素の組み合わせによる広域観光 ・都市観光・まちなか観光等の時間消費活動 ◎地域産業分野 <ul style="list-style-type: none"> ・農林水産業・伝統工芸・民俗芸能と観光等との融合による産業創出 ・農家の民泊受入れ等による経済活力増進 <p>＜守り、育てるための活動＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎フィールドワーク・自然保護活動分野 <ul style="list-style-type: none"> ・清掃などの市民活動 ・教育・研究機関との連携による保全・保護活動 ・流域・里山環境づくり ◎グリーンツーリズム・エコツアー分野 <ul style="list-style-type: none"> ・中高年層の楽しみの増進の活用 	<p>多様かつ複合的な楽しみ方ができ、加えて、遊びや癒しの要素を備える、広域的な広がりのある活動圏を形成し、内外から、観光需要やふるさとを再発見する活動を吸引する。特に、中山間地及びまちなかへの交流・経済需要の吸引に重点を置いて活用することが求められる。</p> <p>■北東北 縄文文化発信連携づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎縄文人の知恵を発見し、ふるさとの誇りとして内外に発信する ◎民俗芸能や冬の祭り、食文化、伝統工芸などと結びつけて楽しみを倍増する <p>＜主体形成の方向＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・既存の連携の輪の拡大を促し、広い情報ネットワークを持つ組織化を視野に入れる <p>■美しい歳時記の郷づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎雪形に代表される生活の知恵の発掘と伝承 ◎農家の参画と組織化による体験学習の受入れ ◎周辺の温泉や食、民俗芸能との複合化による観光需要や都市との交流需要の吸引 <p>＜主体形成の方向＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・将来的には、市町村や観光産業等による組織化が考えられる <p>■ふるさと再発見・文化創造拠点づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎ふるさと再発見活動の展開 ◎地元経済界と有志、観光コーディネーターの参画による広域周遊圏やまちなか観光の企画 <p>＜主体形成の方向＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・行政と地元経済界との連携により活動グループや事業体を育成 	<p>■得るべき効果</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎国内外に強い訴求力で発信する「北東北像」の確立による新たな文化・交流・経済圏としてのジャンプアップ ◎北東北再発見ファンの掘り起こしによる観光躍進 ◎産業経済分野における新たな付加価値生産力の付与と事業者の創業促進 ◎中山間地域における雇用の創出と居住者の生活の安定 ◎ふるさと再発見活動やイベント、文化・交流活動などを通じた北東北躍進に向けた新たな社会潮流の創出 <p>■仕組みと今後の取り組みの展開のあり方</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎重層的かつ多分野による広域連携体制の構築 <ul style="list-style-type: none"> ・三県の連携に加え、拠点的な圏域の広域連携体制の構築 ・経済界をはじめとする多様な分野への連携の幅の拡大 ・データの各方面への提供による活動の輪の拡大 ◎多様な主体が参画する、地域による「活用プラン」の策定 <ul style="list-style-type: none"> ・拠点的な圏域を対象とする構想策定 ◎地元による「ふるさと再発見活動」の支援 <ul style="list-style-type: none"> ・地域外の有識者を招き、巡回方式で定期的に開催する「地域塾」や「市民会議」等による気運醸成 <p>■行政の役割</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎行政計画への位置づけと多主体への呼びかけ及びコーディネート ◎活動の場や情報の提供、資金支援等のプラットフォームの構築 ◎高速交通網などの社会資本の有効活用 <p>■民間（団体）の役割</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎地元経済界や有志による企画立案・事業連携体の形成 ◎活用プラン策定及び具体化への主体としての参画 ◎各種イベントや交流活動の継続的展開 <p>■地域住民の役割</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎NPO等との協働による人的ネットワークづくり ◎ふるさと再発見活動等への参画と輪の拡大 <p>■施策としての具体化に向けた方策</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎地域が主体となった具体のアクションプランと事業プランの策定、並びに組織・体制づくりに結びつける
<p>持続可能な社会形成に係る課題</p>	<p>■経済基盤を強化し、人口減少・過疎の進展を食い止め、持続可能な地域社会を担う人材を育てる必要がある</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域社会の維持のためには、生活の安定の基盤となる経済活力を維持強化することが必須であり、豊かな自然を生かして交流需要を吸引し、経済を創出することが必要 <p>■特に中山間地域において、公共交通サービスをはじめとする生活サービスの確保を図るとともに、生活にかかる負担（時間的・経済的負担）を軽減する必要がある</p> <ul style="list-style-type: none"> ・交流をテーマにした新たな地域づくりの展開によって、狭義の生活支援に止まらず、地域間の連携交流や高齢者の社会参加を含む幅広い社会システム作りによって地域社会を維持していくことが必要 		

参考資料；北東北の風景・景観資源の有効活用に関するアンケート調査票

北東北の風景・景観資源の有効活用に関するアンケート調査のお願い

平成17年2月

現在、青森県では、岩手県、秋田県との協力のもと、北東北3県（青森県、岩手県、秋田県）を対象として「北東北の風景・景観資源の有効活用に関する調査」を進めています。

つきましては、3県にお住まいの方ならびに県外にお住まいの方から3県の風景・景観資源の優れたところ、特徴などについてご意見を伺わせていただき、ご意見を調査結果に反映させたいと考え、アンケート調査を実施することといたしました。

記入できる質問だけでも結構ですので、多くの方々にアンケートにご回答を頂きますよう、なにとぞお願いいたします。

<参考>「北東北の風景・景観資源の有効活用に関する調査」の概要

○調査目的

北東北には、世界自然遺産白神山地を始めとする優れた自然景観のほか、縄文文化等歴史資源、農村の美しさ、伝統芸能等に関わる資源が存在し、それらの保全活用の取り組みやイベント開催の動きも見られます。

この北東北ならではの風景・景観を分類整理し、北東北共有のアイデンティティとして確立することにより、風景・景観を地域活性化の資源として活用することを目的として実施するものです。

○調査内容

- (1) 北東北ならではの風景・景観資源の蓄積活用のあり方の検討
 - ・北東北ならではの風景・景観資源の特性検討、分類整理、蓄積活用のあり方を検討。
- (2) 北東北ならではの風景・景観資源を守り、育てる方針案の検討
 - ・県境を越え、北東北地域が一体となって、住民と行政が協働で、風景・景観に関する取り組みを進めるための方針案を検討。
 - ・景観の保全、創造のための課題設定、魅力創出（表現）手法、守り育てる方針案を検討。
- (3) 北東北ならではの風景・景観資源有効活用の体制の検討
 - ・地域内での広報手法、広域圏における風景・景観資源活用体制のあり方を検討。（多様な主体における連携体制や組織のあり方、住民参画による新たなまちづくり展開や活動支援のあり方等）

（調査担当課：企画政策部企画課）

アンケートご回答は、平成17年2月20日頃までにご投函いただけましたら、幸いです。アンケートの結果は、青森県のホームページで発表させていただきます。

アンケートについてのご質問がございましたらEメールなどで下記までお問い合わせ下さい。

■青森県企画政策部企画課（北東北の風景・景観資源の有効活用に関するアンケート調査担当）

Eメールアドレス：masayuki_tomiya@ags.pref.aomori.jp

電話番号：017-734-9128

FAX番号：017-734-8027

なお、アンケート調査の実施は、青森県より委託を受けて、財団法人 国土計画協会が行っておりますので、同封の返信用封筒によりご返送をお願い申し上げます。

■財団法人 国土計画協会（担当 福田） 東京都港区西新橋1-17-4 西新橋 YKビル2F

電話番号：03-3503-7427

FAX番号：03-3503-7429

ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

問4 北東北3県固有の優れた風景・景観を地域の方々が認識し、それを守り育てて地域の魅力を一層高めるとともに、国内外に情報発信することが大事だと考えていますが、それに向けて、地域の方々が推進することが望ましい取り組みのアイデアがございましたら、何でも結構ですのご記入下さい。

問5 北東北3県の優れた風景・景観を守り育てて、魅力ある誇れる地域づくりを進めることに関連して、ご意見がありましたら自由にご記入下さい。

問6 北東北3県内で、風景・景観を守り育てる、あるいは風景・景観を活用するまちづくりなどに取り組んでいる団体などをご存知でしたら、お教え下さい。

最後に、あなたご自身のことについてお伺いします。

問7 お住まいの場所はどちらでしょうか。

- | | |
|---------------|---------------|
| 1 青森県 (市・町・村) | 2 岩手県 (市・町・村) |
| 3 秋田県 (市・町・村) | 4 その他 |

問8 年齢

- | | | | |
|-------|-------|-------|---------|
| 1 10代 | 2 20代 | 3 30代 | 4 40代 |
| 5 50代 | 6 60代 | 7 70代 | 8 80代以上 |

問9 性別

- | | |
|-----|-----|
| 1 男 | 2 女 |
|-----|-----|

差し支えなければ、ご住所、ご氏名をご記入下さい。(公表することはありません。)

住所

氏名

データベース編

■分類別データ（目次）

テーマ	資源	頁
四季の変化を楽しむ		
人に優しい自然と遊ぶ	・北東北の自然公園と自然環境保全地域	92
	・自然公園	93
	・世界遺産白神山地	95
	・自然環境保護地域とその特徴	96
	・雪形	98
	・地域の人々による自然を守り育てる活動	99
まつりの宝庫をめぐる	・祭りカレンダー	100
	・夏のはじける祭り	101
	・北東北の冬祭り	104
心を癒す名湯・秘湯	・北東北の名湯・秘湯	108
自然を敬い共生する		
山野に囲まれた心地よいまちやむら	・農林水産業関連文化的景観重要地域	110
	・骨寺村遺跡	111
	・農林水産業の風景	113
	・景観形成重点地域（岩手県）	116
	・美しい日本の村景観コンテスト受賞	120
	・美しい日本のむら景観100選	122
	・かおり風景100選	124
	北東北の聖地を巡る	・山岳信仰 ・民間信仰 ・歴史的な社寺 ・義経ゆかりの平泉の古寺と周辺の風景 ・四寺回廊
縄文文化を伝える		
ふるさとの原点・縄文ワールド	・縄文遺跡	131
	・縄文をテーマとする研究交流活動（「三内丸山 縄文発信の会」の活動）	135
縄文人の心に触れる	・民俗芸能	138
	・「田沢湖芸術村」と「わらび座」	141
古代から受け継がれてきた食の知恵	・マタギの食と森	143
	・カシオペア連邦	145
	・雑穀・山菜	146
	・山海の幸を保存する知恵	148
生きがいの場を持つ		
ふるさとの歴史を学び・創る	・伝統的建造物群保存地区	150
	・都市景観100選	152
	・弘前の洋館たち	153
	・歴史的景観を形成する城郭・民家	155
	・産業遺構	156
	・青森県ふるさと眺望点	157
	・岩手の残したい景観	161
	文学ロマンに触れる	・宮沢賢治ゆかりの風景 ・遠野物語
交易の歴史を知る		
歴史街道を行く	・中世の北方交易遺構 青森県十三湊	170
	・北前船の寄港地と文物	173
	・北上川の舟運復活に向けた取り組み	175
	・江戸・明治の流通拠点「江刺市」の蔵を核にしたまちづくり	177
	・歴史街道	179
	旅人の見た北東北	・菅江真澄の見た北東北 ・吉田松陰の見た北東北 ・イザベラバードの見た北東北 ・ブルーノタウトの見た北東北